

資料紹介

山本家所蔵「郭公吟・蕉翁姿情辨」

——佐賀藩西目の文化交流——

多久島 澄子

はじめに

山本家とは、佐賀大学地域学歴史文化研究センターが開設時（二〇〇七年）に調査を着手された伊万里市山代町立岩の旧家である。同家史料は近世後期から昭和期に及び一万数千点を数え、目録作成中である。その調査対象からはずれた三代目源右衛門（一八三一～一九〇二）の俳諧関係資料の中から安政二年の写本「郭公吟・蕉翁姿情辨」を紹介して佐賀藩の伊万里郷、山代郷、有田郷に続いた蕉門俳諧の流れを述べ、この写本作成者谷口陶溪、被贈呈者多久嶋徳之允、徳之允から写本を譲り受けた山本源右衛門義賢を巡る人物網に迫り、佐賀藩最西部における山代郷と隣接の伊万里郷・有田郷の交流を解明するものである。

三代山本源右衛門義賢（以下源右衛門）は、俳諧を中村鼎山（ていざん）（一八七四）に師事し、俳号映雪軒富麓をそのまま法名としている。源右衛門は山代郷における政治・経済界の中心人物であった。その詳細は嘉永七年（一八五四）から明治二八年（一八九五）まで書き続けた日記に明らかである。

中村鼎山は幼少から秀才の誉れが高く多芸多能で、わけても篆刻をよくし、若くして『印章備正』の書を著している。呉雪庵文路（一番ヶ瀬啓右

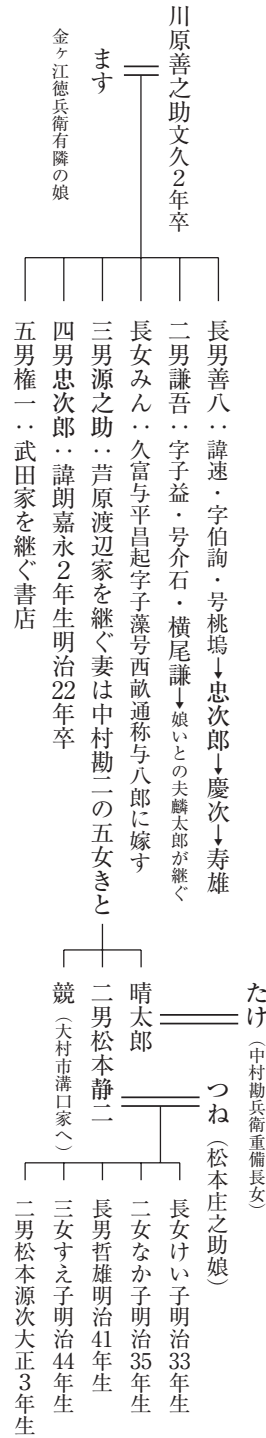
衛門良雍）の後継者として弘化二年（一八四五）頃立机した（田中道雄「佐賀美濃派俳諧の展開」『佐賀大國文』第三十六号）。

鼎山の曾孫松本源次は、その著書に「天保十一年（一八四〇）には世俗を脱れて幸善町に閑居した。その頃、文路から俳諧の奥義と、愛用の文机を授けられて一廉の宗匠になっている」と書く（『有田陶業側面史明治編』三四頁）。文路は、「鳥ならで入る我魂や西の雲」の辞世の句を残し、天保一五年（一八四四）三月二七日、七七歳で没した（円通寺墓碑銘）。文路を追悼し、後継者鼎山が七回忌に編んだのが、『西の雲』（嘉永三年、京都蕉門書林橘屋治兵衛版）である。源右衛門も富麓の号で「雲に入る鳥の影をも吊ふ日」を詠み参加している。

鼎山の墓碑銘には「公卿大夫文人韻士の印を刻し、また熊本藩の招きで二ヶ月滞在して藩主以下の印を刻した。晩年鍋島閑叟公の命を受け印を刻し褒典を受けた」、「学問は和漢を兼ね、書は篆書隸書をよくし、鉄筆の技はその蘊奥を極め、俳諧は美濃獅々庵の流を汲み、これを凌ぐほどであった」、「当時精里、洞庵、圯南の先輩老儒も鼎山の俳歌を見て天才と称した」とある。明治七年（一八七四）三月一日、七五歳を以て没した。

一、鼎山を巡る系図

別表A 中村勘二（鼎山・半升庵）と山本源右衛門（映雪軒富麓）の関係図



* 渡辺源之助は明治26年4月三代目有田町長に就任翌月発病九月五日卒 * 明治36年渡辺家・川原家倒産 * 松本源次は『松本庄之助伝』・『有田陶業側面史』の著者
* 横尾謙は明治32年から38年まで有田町長を務め翌39年卒

渡辺・川原両家は虎王丸（山代孫七郎・鍋島喜左衛門茂貞）に随い山代から若原に移る
渡辺家は松浦源氏の家紋三ツ星を銘柄とする酒造業源之助は明治12年頃有田に移る
* 勘兵衛重備は杵島郡本部副島恵兵衛の四男、弘化3年12月十六歳でみとに養子相続
勘兵衛重備・号梅宇、伊万里上中町九七番の家業富野屋を継ぐ

二代目渡辺源右衛門長女こと明治10年卒6月5日卒

伊万里役屋敷下役

中村勘兵衛重定（嘉永2年4月10日卒）

中村勘二重晴・鼎山・半升庵

実父前川利兵衛の四男で幼名豊助、後に利兵衛

妻たけ（嘉永7年卒永尾政十娘）

前川利兵衛は文雅で名高い一番ヶ瀬家の出身

山代郷御山留永尾政十（弥兵衛）子

勘二は明治7年3月11日卒

永尾嘉右衛門——弥右衛門——永尾源吾長女アイ

五代目左源太

三代目山本源右衛門長男四代目山本源三

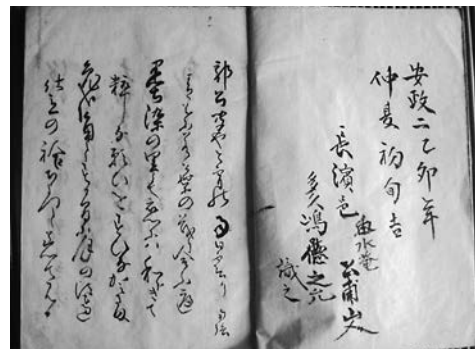
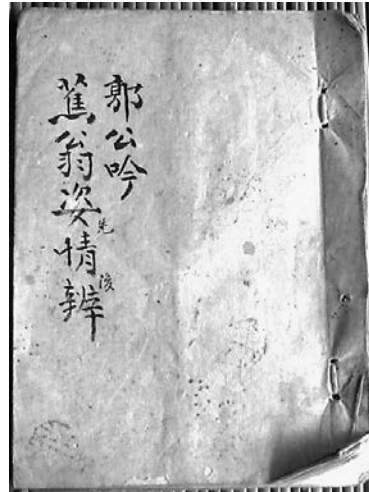
号映雪軒富麓

* 三代目山本源右衛門は嘉永元年「山代郷村々段掛ヶ扣自分帳」に
鼎山よりロウ石印形御拝領として三種類の印鑑を記録している。

一、カタイン南山壽 一、ホンイン映雪軒富麓 一、カヘイン山口氏富麓

『松本庄之助伝』・『有田陶業側面史』・『明治四十四年家系図（中村家）』と山本家・
永尾家の資料をもとに多久島澄子が平成28年2月5日作成した。

二、史料紹介



長濱邑 白水菴 公甫山人
多久嶋徳之允 識之

「ウ

郭公聞や今宵の雨曇り

南強

青葉若葉の茂り合う庭

墨染の里も恋にハ和らきて

粹な願ひをすひなかミさま

兎や角とする間に月の頃も過

仕立の拾ちよつと着て見る

「1

佳葉

汐待の船の儲やほとゝきす

明やすき夜の月も山の端

大切な道の伝授の点り済

禱る誠に神のあらたか

安くと殊に男子の御誕生

雪より白ミかゝる窓先

「ウ

郭公耳に覚へて目に忘れ

有栄

それといふ間に短夜の月

年ふりて松も尊ふとき宮居にて

身請の沙汰に力かましき

蕩々と水の音する雨あがり

史料は表紙一枚、本文一八枚から成る。安政二（一八五五）年に谷口陶溪によって作成された俳諧句の手引書写本である。筆者が加筆したものは□を付して表現した。多久嶋は本文では現在多久島家で使われている多久島にした。

翻刻始め

〔表紙〕実寸縦一七・五cm横一三cm

郭公吟

蕉翁 姿先情後辨

〔本文〕

安政二乙卯年

仲夏初旬吉

落葉埋る、嵯峨の寂さ

「 2

啼ふとハ思ひ懸なや郭公

有栄

濱のわたりの五月雨頃

和らかに松も枝くゝ脈合ふて

粹と粹との訳おもしろひ

とり分て今宵の月の澄ハたり

神の心にかのふ夜角力

「 ウ

鶏の音も幾夜か聞てほとゝきす

菊舎

今ハ涼ふ風雅一心

郭から又化そふの文越して

あちこち通ふ船も毎日

御捌の訳ハ月より明らかに

新酒の初穂まづと神棚

「 3

二夜三夜待つてよふく郭公

菊路

心静かに庵の蚊遣り火

世にハたゞ迷ひ悟りの道有て

仕様模様と流行ぬもよふ

月影の移りも清き京の水

独出ぬかと奉公すゝめる

「 ウ

何氣のう居たのに扱ハ郭公

有栄

頂より覗く賈ひとふさ

ざつとした鍮子の絵にも名の有て

たゞ 闇 ひ俄客来

御妾のまた目も覚ぬ朝の月

社の鈴に秋風もすむ

「 4

あつちには星も流て郭公

其翁

鐘にも啞を撞す夏の夜

氣に染ぬ勤も問夫に引されて

無理に酔てそ又も漬の

霧深ふ秋の最中の空ながら

三輪の御山の杉の間の月

「 ウ

待つ空の闇ハあやなし郭公

霧侶

端居に老の膝も崩さず

雑行を受すてならぬ御家にて

味噌の仕込に暦迄出る

薄着して風も身にしむ月の頃

養父入晴の髪もてかひか

「 5

松の音はかりを受けて郭公

只鏡

汲置の茶もさむる涼風

舞ひふりの仏にうつゝぬかされて

さし合ひくらぬ恋の我まゝ

ありくゝと須磨も見へ透く月の船

豊さも実に満作の秋

「ウ

一聲ハ空耳てなし郭公

東民

老の寐覚の窓の風の香

公家領ハものゝ優通のとりわけて

誓言（ちかひことば）の文のゆかしき

焚そゆる反魂香に月細く

小笹にとまる露のきらく

「6

迎も啼ならハ一声郭公

菊老

明（あした）あふても眠（すくね）ひ宿衾（すくね）の

経ふみつたお妾なからさま付て

恋ハ曲ものとそ神代から

いろくゝの本ハ教へ月明か

老を楽む奥嵯峨の状

「ウ

昼寐して置た徳あり郭公

東民

明に紛るゝ卯の花の晴

武蔵野か只広くゝと有附て

とふやら化しそふな目遣ひ

売たから月の紋日（もんひ）も近ふなり

神の納受の秋ハおたやか

「7

居眠の癖ハとこへか郭公

奥河

明て置戸に薫りくる風

神代から恋の手くたの伝りて

子分限ものゝ自慢だらく

実入よふ洗ひ上たる月の芋

はやかれかゝる空に秋すむ

「ウ

待まつて鳥啼けり郭公

寂青

窓から匂ふ明（あ）る卯の花

悟りとハ浅（あ）ひ所に津の有て

利口にはかりいふて医者殿

よのさまの月の紋日をせり落し

露の玉ちる廓の豊年

「8

雨雲に月ハかくれて郭公

喚我

〔とま〕
笛に寐覚の蚊遣り焚そふ

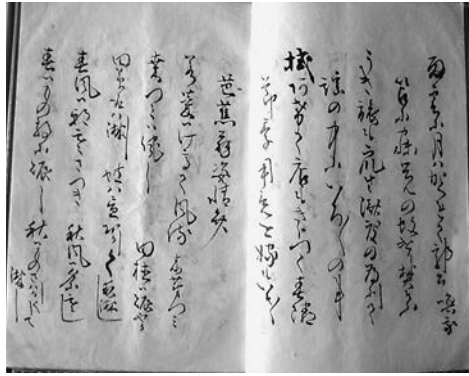
うき旅も衆生済度の為にして

謡の中にいろ／＼の事

拭あけて店もさらつく春隣

節季用意を嫁もいそ／＼

芭蕉翁姿情弁



若菜ハけ高て風流 木芽つミ

桑つミハ侘し 田植ハ賑やか

田草取ハ淋し 蛙ハ昼おかしく夜淋し

春風ハ朝寒さつき 秋風ハ夕に寒し

春ハもの静に賑し 秋ハものさハかしくして淋し

「 9

夏ハ野山深く 冬ハ野山浅し

川狩ハ男の情 茸狩ハ女の情

霞ハ朝薄く夕に厚し 霧ハ朝深く

夕に浅し 木花ハ朝咲く草花ハ夕ニ咲

花の雪ハ眠催す 花雪吹ハ目覚す

花藤ハ賑ハしき躰 咲花も

落花も静にして長閑也 花ハおしミ

紅葉ハおしまず 花園ハ広ク春の様

花壇ハ狭し秋の形 梅ハ瘦て風流

桜ハ太き事に祭 桜ハ長閑なるもの

初紅葉ハ山深し 桃ハ仙家めき田舎めき

賑ハしうして浅し 白梅早く

「 10

寒き情 紅梅ハおそく暖也

さくらハたづぬる 柳ハさがす

梨花位太 〔古カ〕う寒き躰 草の萌るは

氣をいふ 卯の花の雪ハ降ず

卯の花下しハ降る 萩ハ晴に

聲あり 萩ハ月に催す

清水ハ影をうつし 口すゝくとも

足洗ふ事なかれ 初雪ハ待か本意

時雨・霰ハまたす 山の雪ハ昔を催スへし

町の雪ハ朝によし 若葉ハ会釈

「 ウ

「 ウ

なけれハ四月也 草の若葉ハ春也
青葉ハ雜なれ共發句にハ夏季なり

「 11

西瓜ハ夏なれとも秋季なり

御祭りハ伊勢也 祭とハ加茂・祇園也

神樂と計りハ禁裏ニ限る也 余ハ里神樂

里祭りなり 寒き体のものハ

竈ぬり立 白壁ぬり 金屏風

塀ぬり立 酒の酔醒 塩鯛の菌くき

暑き体は

〔トヤビ〕
甍出の鷹 紅流し 緋ちりめん

涼しき体ハ

拭縁 松林原とも 川端 鶴 帟 銀屏風

夜眠らざる鳥ハ

鴈 千鳥 子規 鴛 鴨の類

「 12

暁より鳴鳥ハ

雉子 鶯 〔クハヒナ〕 水鶏 〔ヒナ〕 雀の類也

鶯ハ朝か本意也 枝に啼 鹿は

夕へ本意也 子規ハ野山尋て聞く

心なり 啼てくるか本意なり

枝に啼ざるにもあらず 鵲、秋の鳥

「 ウ

なれ共冬の季よし 夏蛙高き所に
なく 秋の蛙ハ地下に鳴く

蝸牛ハ家荷ひ 蓑虫ハ枝に下り

父恋しと鳴く 虫音と砧とは

夜分を結ふ事なし 鶯ハ親に

つる、也 白魚ハやさしくよハし

「 13

桜鯛ハ美しく賑ハし

鮎ハ親子つる、事なし 〔フク〕 鰻 汁ハいやしく

喰ざる方よし

陽炎ハ消て明るし 稲妻ハ消てくらし

月夜になきにあらす 淡雪ハ地に 〔ナガメ〕 詠有

氷ハ雪より早し 霜ハ氷より早し

村雨ハ雜なれとも四月・七月に用る

夏菊下より開き上る也 秋菊ハ上より

開き下るなり 芦の角ハ芽をいふ

鶏頭枯ても色かハらす

紙衣 〔カミゴ〕 氣高くて老の姿 紙 〔カミナシ〕 衾ハいやし

屏風・几帳・珠数の類ハ連歌にも用る

「 14

作意あるべし

扇子・袷・夜着・蒲団發句にハ

季なるへし 附合にハ雑たるへし尤前句ニ
よるへし

彼岸・出代・養父入二季に渡れとも

春也 春秋の文字なき時も前句に

移て季に用るへし

鐘の音ハ打といわす 砧〔きねた〕も作意に

よるへし 衣はうちなるへし

春の月ハ薄きを愛し 秋の月ハ

限りなく見る 夏の月ハ原にて

面白し 冬の月ハ原にておそろしく

「
ウ
15

名月やとしたるにハ作意なくてならす

汐干春也 汐の干渴ハ句によつて季なし

暮とハ七ツ時分也 夕へハ六ツ時の

上刻也

夕まくれハ六ツ過ての事也

夕まくれとある事悪し

外に口伝

「
ウ

秋の雨音して淋し 眠にもちと音高し

秋の雨雁金といへハ聲をせず 鴈ハ題ニ

つく聲なし

茶の花ハ在所めき

冬瓜ハ秋なれとも霜を賞翫せる
ゆへ冬の方よし

「
ウ
16

冷麦・冷汁ハ夏の方なるへし

右此壺巻ハ佐嘉往来途中

八幡町酒屋の本なるをかり来

写はやと思ひける折節

多久嶋氏の令息の千字文

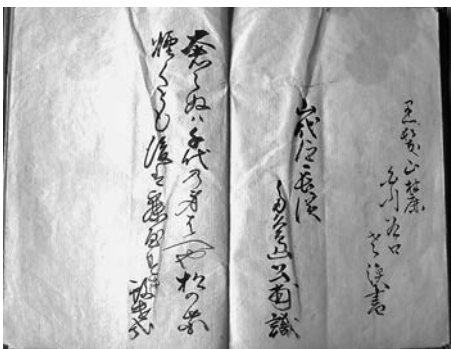
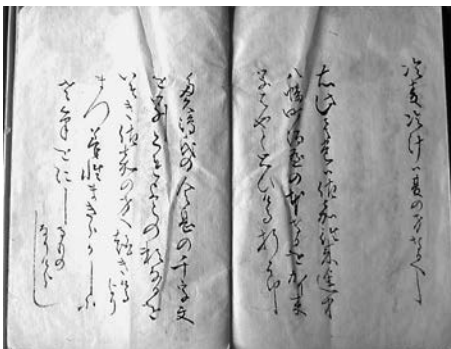
を写しくれよとの頼なるを

いそぎ佐嘉の方へ趣きけるより

まつ善性まきらかしに

老筆をにしろものなりけらし

「
ウ
17



黒髪山麓

白川谷口

老漁書

山代郷長濱

多久嶋公甫識

「ウ

奢らぬ八千代の身はへや松の花

煙くとも後は寐やすき蚊遣哉

「18

「ウ

三、史料解説

写本「郭公吟・蕉翁姿情辨」は二つの内容を含む。

前半の『郭公吟』は、郭公を詠んだ発句で始まる表六句を一六組集めたもので、五組目の作者・菊舎は、長門の女流俳人で、天明六年（一七八六）から七年（一七八七）までと寛政八年（一七九六）から一〇年（一七九八）までの二回九州旅行をし、佐賀の美濃派俳人とも交流した田上菊舎である。天明七年四月一日から六月三日にいたる菊舎の俳諧記録「一声行脚夜長の談笑二」の中に、南強・佳葉・有栄・菊路・只鏡・東民・喚我の名と作品を見ることができる。『郭公吟』に収まる菊舎の作品「鶏の音も幾夜か聞

いて郭公」以下の六句は、そっくりそのまま長崎の記録のほぼ末尾に掲載され、「林田氏有栄の亭にあそび馴て、主人は元より佳葉・菊路の二婦人、道に修行の信をつくされ、あしたに訪ひゆふべに招かれて」と文章が続く。「崎陽にかりそめの旅寝も、すでに三十余日にあまれる」ところで、師百茶坊との美濃派拡大の旅は、長崎をあとにして佐賀へと向かう。

寛政八年、菊舎四四歳の作品「九国再遊墨摺山二」に記述された、「文月二八日長崎から屋町の林田氏のもとに落着く、林田氏親子ともども」からは、佳葉と菊路は母と娘とわかる。天明七年の記録と重複する名前は、佳葉・菊路・喚我の三人のみである。

喚我は「長崎の美濃派宗匠で文化九年（一八一二）に没した」という。以上のことから『郭公吟』の菊舎を除く一五名の作者は、長崎の宗匠喚我社中の人物、もしくは関わり深い人物であろうと考える（上野さち子『田上菊舎全集』上下）。

佐賀美濃派四代目宗匠・十方庵画山が、文政七年（一八二四）に編んだ旅の記念集『笠の露』には長門長府の古老、一字庵雅尼菊舎の作品が収められている（『佐賀県近世史料第九編第一巻』一八一頁）。

後半の『蕉翁姿情辨』はそれぞれ季語が帯びるべき情趣について、「若菜はけ高」く詠みなさい。「田植えは賑やか」に詠みなさいと、具体的に教え、表紙に「蕉翁姿情辨^{先後}」と、美濃派の重要概念「姿先情後」に基づく書入れがなされている。

写本の由来は、長浜邑（山代郷長浜村）に住む①白水菴・公甫山人・多久島徳之允が、黒髪山麓白川に住む②谷口老漁から安政二（一八五五）年五月上旬に贈られたもので、見返しと巻末に多久島は自著し、「奢らぬは」「煙くとも」の二句を書き込んだ。

②谷口老漁は、佐賀に出かけた折、八幡町の酒屋からこの史料を借りて来て、書写に取り掛かろうとした矢先、多久島氏の子息から『千字文』を書写してくれと依頼があった。しかし、急いで佐賀に行く用事があるの
で、『千字文』書写の前にとりあえず急いでこの「郭公吟・蕉翁姿情辨」を書き写したという状況であったようだ。

諸資料から、①は山代郷長浜村で代々山代郷大庄屋を務める多久島徳之允致輔（文化六・一八〇九年生）で、生立ちは、有田皿山白川役邸に住む佐賀士族清水武平の三男に生まれ、才幹を買われ、山代郷大庄屋を継いだのであった。

②は有田皿山代官所官吏を勤め、のちに白川で塾を営む谷口陶溪（寛政二・一七九〇年生）である。多久島徳之允は、詩歌俳諧を好む谷口陶溪の門下生であった。

多久島徳之允（白水菴・公甫山人）の作品は、明治七年卒去した中村鼎山の供養追善集として出版された『恩のわかれ』に、「辛抱の功の届いて大谷田」・「春の夜の夢やなみだの夢ならず」の二句を読むことができる。作品が筆頭から数えて五人目に掲載されているところから、門下生の中に占める地位の重さと鼎山との交りの深さが想像される。

多久島徳之允致輔と谷口家との親交は、別表B「多久島翁書畫帖首」〔『藍田谷口先生全集』一卷三五頁〕に明らかであり、藍田の母親（陶溪の妻）が文久二年（一八六二）八月に亡くなった際には、陶溪門人筆頭として、四六人の篤志を募り「清水夫人墓碣誌」を完成させている（『前書』一卷三七頁）。多久島致輔の子忠一は明治維新後、官吏・教員を経て神主を業とした。

四、写本「郭公吟・蕉翁姿情辨」が何故山本家に存在したか

写本「郭公吟・蕉翁姿情辨」が何故山本家に存在したかということを知るには、佐賀藩西目地方を知る必要がある。

まず「郭公吟・蕉翁姿情辨」を書写した谷口陶溪とは、佐賀本藩の皿山代官署や大川内藩窯の主簿を勤め、のちに有田白川で開塾し童を教えた。父親三宅省陰は泉州高澤林庵に学んだ医師で、跡を継いだ兄三宅曹悦は有田新村で外科医をしている。妻は清水伯安の娘縫で、弟清水龍門は儒を以て武雄邑主に仕える学者で、陶溪と縫の長男藍田を教授した。

写本「郭公吟・蕉翁姿情辨」は谷口陶溪によって作成され、多久島徳之允へ贈られ、その後山代郷立岩の山本家三代目源右衛門に渡った。

源右衛門は、中村鼎山の門弟で、鼎山自ら作成した芭蕉「五問答」、蕉門「元禄七雄」の掛け軸を受け継いでいる。家は、鼎山の義母だけが生まれた山代郷大山留・永尾家に近く、源右衛門の嗣子源三は、永尾家から妻アイを迎えている。源右衛門は酒造と石炭で台頭し、俳諧を好む同志として、山代郷を動かす大庄屋多久島徳之允との親交も深めていったものと思われる。

中村鼎山は、寛政一二年（一八〇〇）前川家に生まれ、文政八年（一八二五）に、有田皿山代官支配下伊万里役屋敷下役中村勘兵衛の養子となり、二代渡辺源右衛門の長女ことを妻に迎え、天保十一年（一八四〇）幸善町に移り、書舗太古堂を開き、実に学徳高い君子であった。別家に移ったのは、呉雪庵文路から宗匠を引き継ぐこともその理由となったのではないだろうか。

別表B 「藍田谷口先生全集」巻一、三五頁

多久島翁書畫帖首

多久島致輔我縣伊萬里永濱人也、嘗師事我先考、略涉史書、好俳歌。一日携此帳來、謂余伝、吾年六十八、婚嫁已畢。將詣出雲大社、常陸神祠而有所題、且傍叩諸名家乞書畫、子為吾云、問神何也。致輔張目云、夫吾邦號細戈千國、又以十握劍為天皇傳位神器、其尚武舊矣哉。今也禁帶刀、廢擊劍、士氣不振、廉恥拂地。夫出雲常陸二神、武神也、默而不省、此何理也。今之所為果是、而古之所行果非邪、吾將質我疑也。余笑云、嘗聞翁之拜伊勢太神、自出其門至神廟、千里之遠、著上下服、晝夜不脫、今又出此言。嗚呼、謂之迂叟邪、謂之狂生邪、姑書其言、介其所之、諸家將有公論矣。

明治十年神武祭日〔四月三日力〕

別表C 多久嶋家系図 「多久嶋代々御奉公申上候荒増」より

長濱村庄屋并山代郷御境目方心遣役

日峰様百年御忌御焼香被仰付

①多久嶋傳左衛門 ——— ②多久嶋奎之允上下帶刀被指免 ——— ③多久嶋四郎兵衛 ——— ④多久嶋七郎左衛門 ——— ⑤多久嶋徳右衛門御靈前之塩奉献上 ———

御山方大山留兼務被仰付

天明二年山代郷大庄屋被仰付大山留は水尾政十へ

⑥多久嶋傳七 ——— ⑦多久嶋徳右衛門 ——— ⑧多久嶋徳右衛門庄屋役は次男徳兵衛へ ——— ⑨多久嶋七郎左衛門後徳右衛門 ——— ⑩多久嶋鹿之允 ———

徳右衛門の甥安政二年卒

徳左衛門義子天保十四年に大庄屋相統・明治三年八月卒八〇歳（多久嶋家系譜）

⑪多久嶋徳左衛門悦延 ——— ⑫多久嶋徳之允…藩政最後の石場（陶石採取場）の定番役 ——— ⑬多久嶋忠一天保一三年一〇月生

（『松本庄之助伝』九九頁、『肥前陶磁史考』四六六・五三二頁）

明治二年頃石場近くに住み妻は松本庄之助の従姉妹（『松本庄之助伝』）

松本平左衛門 ——— 二男松本弥左衛門 ——— 庄三郎安政六年没三六歳

——— 庄之助（岩松平吾の兵児親）*兵児親子Ⅱ有力者を兵児親に恃み白羽二重の兵児帯を貰い兵児息子となる兵児親は子の西村とも（祖母ひろ中牟田倉之助実母石子の乳母） 誕生日に食事に招き、兵児息子の方は盆暮れに贈物をする慣習

鼎山の義父中村勘兵衛は、伊万里役屋敷下役の他に、呉服・太物から金物・農具・荒物雜貨等を大きく商い、その店は「富野屋」と号し、その妻だけは、山代郷大山留永尾政十の娘であった。

鼎山の俳諧の師、呉雪庵文路（一番ヶ瀬啓右衛門良雍）は、伊万里津が焼物輸出で一番賑わった文化・文政期に、美濃派獅子庵の流れを汲む宗匠として門下生の拡充を図り、商いも成功して、文政二二年には『紀行世事の凍解』^{いどげ}を刊行した。この文路の跡が、半升庵鼎山中村勘二で、弘化から明治七年まで三〇年の長きに亘り宗匠を務め、伊万里津文化の中心に在った。鼎山の死後は、陶器商「岩佐」三代目岩本佐兵衛・蘿月園指井が継いだ。指井は明治一二年に没し、その跡は二代目中村勘兵衛重備・黄金舎梅宇（鼎山の長女の夫）が継いだ。このように伊万里津では有力商人によって美濃派俳諧宗匠は代々受け継がれ、明治期まで盛んであった。

長浜村由来について触れれば、藩祖直茂公は、佐賀の地に食塩が乏しく、筑前から大部分を移入していたので、自給の道を開こうと慶長一九年（一六一四）黒田藩に請い、筑前姪浜より製塩技術者を移住させ伊万里湾に面した瀬戸と長浜に塩田を築いた。長浜村の塩浜を担当したのが武藤九郎兵衛・下村蔵之允・志田弥左衛門等で、多久島家の先祖多久島傳左衛門は、元和二年に平戸多久島（現度島）から移住し、村役を務めたとある。姪浜からの移住者は、浄土真宗「教法寺」（現伊万里市立花町）を建て、「志賀大明神社」を勧請した。「志賀大明神社」には宝暦年間に日峯様（直茂公）を合祀して志賀神社と称するようになった。地元民はこの神社を「につばうさん」と呼びならわし、現在は毎年九月一日に祭事が継承されている。

山代郷大山留永尾弥右衛門の天保の記録によれば、長浜塩田の献上塩は、二斗入の俵にして十俵前後を、塩の道（長浜→伊万里→川古→北方→

大町→牛津→佐賀）を持運夫丸六、七人によって搬送され、佐賀城の台所まで届けられている（「永尾日記目録」）。

山代郷は小城藩の目代（現伊万里市山代町久原）の支配下だが、本藩有田皿山代官の権限の及ぶところでもあり、二重行政下にあった。

有田郷は焼物貿易で早くから海外に目を向けた文化・経済の先進地であり、伊万里郷は有田焼の国内向け積み出し港伊万里津を中心として栄えた一大商業地で、蕉門俳諧美濃派もいち早く入った土地柄である。

山代郷はこのような有田郷・伊万里郷に多大な影響を受けつつ風光明媚な海・山の自然に恵まれ、中世から松浦党以来の独特の文化を発展させてきた。多久島徳之允と山本源右衛門は、幕末から明治に懸けて山代郷の政治経済の中心人物として、また鼎山同門として誼を深めていた。

おわりに

「郭公吟・蕉翁姿情辨」は、安政二年、谷口陶溪によって写本が作成され、多久島徳之允に贈られた。写本はその後、三代目山本源右衛門に渡り所蔵され今日に至った。三代目源右衛門の蔵書『西の雲』・『招く魂集』・『松浦』・『通ふ夢』・『うつゝの姿』・『恩のわかれ』によって伊万里津の美濃派俳壇宗匠の流れを知ることができる。すなわち、呉雪庵文路→半升庵鼎山→蘿月園指井→黄金舎梅宇へと継承されたのである。

中村鼎山の生涯が松本源次氏の著書で判明したことから、山本源右衛門・多久嶋徳之允・谷口陶溪と彼等を取巻く永尾家・渡辺家・川原家・松本家・久富家等まで詳しく知ることができた。一冊の写本から、幕末佐賀藩の西目の俳壇並びに人間模様が、解明されるとは甚だ興味深いことであ

る。この稿が俳諧研究をはじめとして幕末佐賀藩の研究に役立つことを祈念する。

謝辞

左記の方々には資料の提供・発表についてご快諾いただきました。記して感謝申し上げます。

山本進様 永尾功登氏様 多久島信子様 前山博様 中村勘二様。

田中道雄先生には多大な御教示と御励ましを賜りありがとうございます。記した。

参考文献

山本源右衛門（三代目）「山代郷村々段掛ヶ扣自分帳」嘉永元年

「多久嶋代々御奉公申上候荒増」文政九年（一八二六）

前山博「永尾家日記目録」天明四年（一七八四）—嘉永三年（一八五〇）

「明治四十四年家系簿」（中村勘二氏所蔵）

参考文献

呉竹園文獅編『西の雲』呉雪庵文路の七回忌追善集、嘉永三年、蕉門書林

橘屋治兵衛

指井・指山編『招く魂集』養老舎指孝一回忌追善集、嘉永三年、蕉門書林

橘屋治兵衛

半升庵鼎山編『松浦』歳旦帳、嘉永四年、京橘治刀

半升庵鼎山編『通ふ夢』三畝亭麦杖の供養追善集、嘉永六年、刊記欠

雪後庵文山編『うつゝの姿』松花園文和の前至忌追善集、嘉永七年、京伴

刀

梅宇・悠山編『恩のわかれ』鼎山の供養追善集、明治七年、京吉甚

上野さち子『田上菊舎全集』上下、二〇〇〇年、和泉書院

谷口豊季章編『藍田谷口先生全集』一九二四年

西松浦郡役所編『西松浦郡誌』一九二一年

中島浩氣『肥前陶磁史考』昭和十一年、復刻一九八五年、新潮社

松本源次『松本庄之助伝』一九八三年、麦秋社

松本源次『有田陶業側面史—松本静二の生涯—』明治編 一九八五年、麦

秋社

田中道雄「佐賀美濃派俳諧の展開」〔佐賀大國文〕第三六号、二〇〇八年）

佐賀の文学編集委員会『佐賀の文学』一九八七年、新郷土刊行会

佐賀県立図書館『佐賀県近世史料』第九編第一巻 二〇〇四年

伊万里市史編さん委員会『伊万里市史』近世・近代編 二〇〇七年

前山博・多久島澄子 新発見の「伊万里歳時記」〔烏ん枕〕五三号、一九

九四年）

多久島澄子「峯源次郎日暦—安政二年から明治二十四年—」〔西南諸藩医学

教育の研究〕、二〇一五年）

（幕末佐賀研究会・伊万里市郷土研究会会員）

別表1 山本家系図 山本進氏資料から多久島作成

	名前	生年月日	西暦	没年月日	西暦	行年	法名	生家
鼻祖	山本弥三兵衛	元和4年	1618	元禄3年11月28日	1690	72		
妻	俗名不詳			元禄4年2月15日	1691		心翁妙源禪定尼	
初代	山本源右衛門	宝永6年	1709	寛政5年2月6日	1793	84	機外道輪居士	
妻	キク	安永9年	1780	明治2年10月16日	1869	89		
二代	山本源右衛門	寛政12年	1800	明治2年6月19日	1869	69		
妻	スエ	文化3年1月18日	1806	明治23年7月22日	1890	84		立岩小柳庄兵衛家
三代 前名	山本源右衛門・義賢 卯之吉	天保2年9月10日	1831	明治35年11月26日	1902	71	映雪軒富源光義賢居士	西分、吉田弥右衛門長男
妻	シチ	天保3年12月14日	1832	明治44年5月23日	1911	79		立岩門ノ上、浦七右衛門家
四代	山本源三	安政2年1月3日	1855	昭和3年10月8日	1928	73		
妻	アイ	安政5年3月10日	1858	昭和4年12月11日	1929	71		小波瀬、永尾源吾長女

法名記録

□雲領月居士	文化4年6月6日三代目源右衛門の祖祖父山本村右衛門57歳
鳳山蒼梧居士	文化12年7月9日三代目源右衛門の先祖父源右衛門33歳
鶴山□亀居士	嘉永6年1月5日84歳

別表2 多久島家系図 多久島家資料から多久島澄子作成

	名前	生年月日	西暦	事項	西暦	没年月日	西暦	行年	法名	墓所
初代	多久島傳左衛門			元和2年平戸多久島より長浜村に移住、庄屋・御境目方心遣役	1616					不詳
二代	多久島奎之允			同上相統						不詳
三代	多久島四郎兵衛			同上相統						不詳
四代	多久島七郎左衛門			累世相嗣奉職其功を賞し小式島を賜る		正徳5年6月	1715		誠譽恕信士	長浜村上の丘草
五代	多久島徳右衛門			日峯様百年御忌御焼香被仰付		享保5年3月	1720		法譽玄輪居士	長浜上
六代	多久島傳七					享保9年7月	1724		相心阿離信士	長浜上
七代	多久島徳右衛門			祖先の職務を受継ぎ大山留を兼有功を以鍋島公の兵卒に編入せられ家禄5石5斗を賜う、当家中興の祖		宝暦11年3月	1761		大譽慈音親□居士	長浜村中央観音山
八代	多久島徳右衛門			夏崎堀堤防を創築の際古代の兜鎧刀剣矢の根を発掘、家宝として八幡社を建て祭祀す		明和6年7月7日	1769		観譽涼玄居士	観音山
九代	多久島七郎左衛門 (後に徳右衛門)			天明2年山代郷大庄屋被仰付大山留は永尾政十へ譲る	1782	寛政5年1月26日	1793		永譽受潤居士	観音山
十代	多久島鹿之允					文化13年1月25日	1816		觸譽見光離脱居士	観音山
十一代	多久島徳左衛門					安政2年3月11日	1855		卒廓譽然哲大居士	観音山
十二代	多久島徳之允致輔 (むねすけ) 幼名雄三郎、俳号公甫、 高年に得壽翁			実父は佐賀士族清水武平、三男として皿山白川役邸に誕生 小島氏の推挙で多久島家の義子となり天保14年に大庄屋相統 67歳にして諸国遊歴し伊勢・常陸・出雲大社諸社に詣でる	1843	明治23年8月21日	1890	80	神道	観音山
妻	十一代の長女芳	文政5年1月7日	1822			明治30年5月8日	1897	76	神道	観音山
十三代	多久島忠一	天保13年10月10日	1842	幼名祐一郎		明治42年7月18日	1909		神道	観音山
妻	有田針尾徳太郎長女勇子	弘化3年12月26日	1846			昭和9年3月16日	1934	89	神道	観音山

別表3 谷口藍田家系図 藍田谷口先生全集から多久島作成

	名前		生年月日	西暦	没年月日	西暦	行年	事項	出典
①	活雲玄龍居士				安永8年12月30日	1779		明治12年(1879)百年祭	一卷44頁
②	三宅省陰	①の息子			文化中		78	泉州の高澤林庵に医学学び有田で開業本姓金子、故あって三宅氏を名乗る	一卷13頁
妻	佐賀江口氏								
③	三宅曹悦	②の長男	天明2年	1782				外科医師、故静陰門人、嘉永6年(1853)11月3日72歳、有田郷新村在住	一卷13頁「適嗣曹悦継家」『上村病院250年史』224頁
④	谷口陶溪 諱栗、字子栗、 通称寛平、源兵衛	②の二男	寛政2年	1790	文久3年5月16日	1863	74	有田官署・大川内陶署主簿、有田白川で童に書を教授す詩歌俳諧を好む。高楊・穀堂・内田禮興先生に師事、草場珮川・千布紫山・馬島文岱・武富圯南と交友	一卷15頁
妻	清水伯安の娘、縫	龍門の姉			文久2年8月9日	1862	71	稗史・解剣術を読む	一卷37頁
⑤	谷口藍田 諱中秋、字大明治、 幼名秋之助・宗平	④の長男	文政5年8月15日	1822	明治35年11月14日	1902	81	天保10年原明村眼科医木下俊二に入門するも辞去英彦山で易を修得、翌11年日田広瀬淡窓に入門	五巻藍田先生年譜
妻	号少蘭、諱益	眼科医木下俊二の娘	文政5年	1822	明治8年7月28日	1875	54	書画を亀井少琴に学ぶ	一卷45頁、五巻藍田先生年譜
⑥	谷口廉齋 諱延、字季年	④の三男大川内 官舎で生まれる	天保7年1月20日	1836	明治23年2月14日	1890	54	医師、明治11年埼玉県深作村で小学校教師の傍開塾漢洋学を教授	一卷80頁
妻	水戸幡鎌氏	水野義郎の姪						略知漢洋学、頗有内助	一卷81頁

別表4 永尾家系図 永尾家資料から多久島作成

	名前	没年月日	西暦	法名	備考
初代	永尾太郎兵衛	元禄7年12月8日	1694	蚬轍浄圓居士	
二代	永尾佐五右衛門	宝永6年9月19日	1709	浄照周清居士	
三代	永尾政右衛門	安永5年7月7日	1776	實翁浄諦居士	
四代	永尾政十(弥兵衛)	文化12年10月13日	1815	義山壽翁居士	天明2年(1782)大山留拝命
	永尾仁右衛門	文化4年9月11日	1807	一翁常静居士	嘉右衛門の父
五代	永尾嘉右衛門	文政12年8月3日	1829	密阿良観居士	
六代	永尾弥右衛門	明治7年4月18日	1874	徳壽誠栄居士	
七代	永尾源吾	明治38年7月10日	1905	覺翁壽仙居士	
八代	永尾喜作	昭和20年7月30日	1945	栄光院喜岳良壽居士	
	永尾守一	昭和7年8月18日	1932	靈臺寂照居士	